

塩出 澄子

大会 2 日目の対談フォーラムで「こうのとりのゆりかご」を開設された慈恵病院の蓮田氏、田尻氏の話が印象的でした。「こうのとりのゆりかご」は、社会に大きな波紋を投げかけ今でも多くの相談が全国から寄せられ、望まない妊娠の相談を 24 時間 365 日体制で受けています。出産後実母が養育するようになったり、特別養子縁組を成立させたり、相談したことによって救われた命がたくさんあったことをお聞きし、積み重ねた日々のご苦労に頭が下がりました。

蓮田氏は設立にあたって、ドイツに視察に行ったり、さまざまな難問に苦悩されていた時、「愛の反対は憎しみではなく無関心である」というマザーテレサの言葉に、後押しされたお話しをして下さいましたが、深いことばだと胸にしみました。

また、基調講演でヘネシー澄子氏が話された愛着の絆物語は、赤ちゃんへの優しさにあふれていました。一つの生命がこの世に生まれ幸せに生きる為に必要なことを、脳の働きを通して分かりやすく話されました。お母さんの胸の体温が 3 度くらい暖かいのは、赤ちゃんを温めるため。そして赤ちゃんの耳は、生まれた時からお母さんの心音を最初に聞くためにできている。など母子のこの身体的神秘は絆の贈り物だと感動を覚えました。3 ヶ月までの新生児のこの時期が心の発達にとっても重要であることが解ってきており、愛知方式と言われる里親制度の意義も大きいと思いました。

里親さんたちのご苦労は、察して余りあるものがあります。でも会場でお目にかかった、赤ちゃんを抱っこしたパパ里親さんのホンワカとした人柄に、幸せのお裾分けを頂いたような暖かい気持ちになりました。「この子は実子で、上の子 2 人が養子で高校生と中学生になった。この子は我が家のアイドル」と言われ、3 か月の目のくりくりした坊やは、手を動かしパパの胸に顔を擦り付けながら、得意げに声を出していました。里親さんへのイメージが、一瞬で変わった出会いでした。

小さな人たちが少しでも幸せになるために、たくさんの人達がこの里親大会に関心をもって頂きたいなど、そんな思いを持った、中身の濃い一日でした。CAPNA にいたからこそ、この場に参加させて頂けたことに感謝したいと思います。

CAPNA の電話相談でも来期から、望まない妊娠をした人たちからの相談を受けることになりました。マザーテレサの言葉をかみしめたいと思いました。

CAPNA

キャプナニュースレター 68 号

震災復興の足取りは重く、EU 発の世界不況の恐れも高まるこのごろ。国に新しい施策を求めるのは、とても難しい時代になってきました。だからこそ、地道な市民の取り組みがますます重要になります。

野辺には、コスモスが花盛り。風に揺れるはかなげな花だけど、どっしり根を下ろして、仲間たちを増やしていきます。私たちも、厳しい風に立ち向かってきましょう。

Vol. 68

ご寄付 皆様からご寄付をいただきました。心より御礼申し上げます。

【個人】 (2011.7.1 ~ 2011.9.30 分、順不同・敬称略)

近藤昭子、坂本精志、黒岩みのり、植田有里子、野田正文、ミツグチアケノ、篠原祐三、ウォンドンペンブラ、競朗子、今西洋子、他匿名 4 名

【団体】 高田不動産商事株式会社、国際ソロプチミスト名古屋

CAPNA ニュースレター 68 号

2011 年 10 月 15 日発行

発行 認定 NPO 法人 CAPNA

事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内 1-4-404 TEL.052-232-2880 FAX.052-232-2882

印刷 社会福祉法人名古屋ライトハウス光和寮

子どもたちの未来へ熱い討議

特集 全国里親大会あいち大会

第57回全国里親大会あいち大会が10月1, 2日、名古屋市東区のウィルあいちで開催されました。CAPNAも主催団体の一つとして名をつらねたこの大会。「こうのとりのゆりかご」で知られる熊本慈恵病院の蓮田太二理事長と田尻由貴子看護部長を招いての対談フォーラムなど、意欲的な内容でした。大会に参加したCAPNA関係者の思いを紹介します。

できないと言わず、まずやってみよう

矢満田 篤二

全国里親大会あいち大会は、女性のパワーを改めて感じさせる大会でもあった。

数百人規模が参加する全国里親大会ともなれば、申込先として複数の担当者を配置して社会福祉協議会内などに事務局を置くのが通例である。だが、この大会は、愛知県里親連合会会長である柴田寿子さんが自宅でそれを引き受け、多くの里母さんたちがそれを支えた。愛知県では20年前、親と暮らせない子どもを引き取って育ててきた里母さんたちが互いに育児の悩みを話し合う自主交流会を結成。その主要メンバーが県里親連合会で活躍していることが大きい。

過去の大会では、永年里親を務めた人の表彰と行政説明、有名講師を招いた記念講演とアトラクション付きの懇親会、そして観光地巡りが定番だったようだ。今回は違った。里親家庭で育った子どもたちの思いなど、里母さんたちが必要としていた学習場面を9つの分科会に仕立てて設定した。基調講演の講師には、会員たちが念願していたヘネシー澄子・社会福祉学博士を招いた。産みの親との縁が薄い赤ちゃんたちの実態に胸を痛めている里母さんたちは、「対談フォーラム」という形で、熊本から招いた慈恵病院の蓮田太二理事長と田尻由貴子看護部長による「匿名乳児救済施設」(通称:こうのとりのゆりかご)の現状を説明する場面も設けた。その横には、CAPNA理事の萬屋育子・前刈谷児童相談センター長。児童福祉行政としては、全国に例のない「新生児養子縁組・里親委託」を二十年余続け、愛知県の全児童相談所が取り組むまでになった基礎を築き、今年の3月、定年退職した方だ。

この「赤ちゃん縁組」に関して、初期の頃に児童福祉司だった私も手がけていたことから、萬屋さんのすてきな活動を傍証する役目を担当させていただいた。慈恵病院を紹介するビデオ「命の行方を見つめて」とNHK熊本放送局が刈谷児相まで取材に来た「検証・赤ちゃんポスト報告書」の抜粋編、および慈恵病院の活動を統計データで示したスライド紹介などは、「子どもの命を守るために」という主題に添って、説得力が十分あったはずだ。文字通りに「花を

添えた」のは、新生児の時に家庭に迎えられた2歳の坊やによる蓮田さんへの花束贈呈だった。この日、福井県から親子3人で駆けつけてくれた。このご両親による「参加者の皆さまへ」という体験報告文に涙した人もいたと聞く。



対談フォーラムで熱い思いを語る萬屋育子・CAPNA理事

さて、平成22年度の一年間に、新聞報道された児童の虐待死を年齢別に見ると、最多は、生後24時間以内の乳児で18人。ほとんどローカル記事で終わり、2、3歳児が餓死した大阪の事件ほどには注目されていない。せめてもの救いは、厚生労働省の高橋課長が、予期せぬ妊娠をした女性からの「匿名相談にも対応する体制へ」と、今後の方針を説明したことだった。

慈恵病院は、「ゆりかご」を運営しつつ、24時間無休で無料電話相談を受けて、全国から殺到する悩みに応じている。その維持費は、年間1千万円余。支援者たちの浄財が支えている。蓮田さんは激務の結果、さる8月に体調を崩して大手術を受け、まだ1週間前に退院したばかり、夫人が付き添い車椅子で参加された。今春、田尻さんも過労で慈恵病院に一時入院した。これを知る人は少ない。

熊本の一病院だけに労を背負わせるのは、もう限界にきている。今回の里親大会は、赤ちゃんの虐待死を防止するために、多くのことを気付かせたはずだ。CAPNAの初代代表だった故・祖父江文宏さんの言葉、「できないと言わずに、まずやってみようよ」は忘れられていないと信じている。